

巻頭言●主任司祭 藤川神父

いのち / 永遠のいのち

「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」(マルコ10/17)今の世の中、一体どれだけの人が“永遠のいのち”について考えたりするでしょうか。この世の“いのち”でさえ、粗末にされているというのに。イエスのもとに走り寄って、ひざまずいて尋ねたという人は、恐らく若い人だったと思われます。高齢者や病を抱えた人であれば遠くから走ってきて、すぐにひざまずいたりしてはできないでしょうから。ぜいぜい息を吐いて、イエスの前でへたりこむのが関の山でしょう。若い人が、“永遠のいのち”を気にするなんて、見上げたものです。今時の人であれば、楽に楽しく今を過ごすのに夢中であったり、仕事や金もうけにあくせくするのに忙殺されることでしょう。

10月11日早朝、この調布で痛ましい事件があったのを、皆さんも新聞やテレビの報道で知り、その記憶も今だ定かだろーと思えます。近くの電通大学の校舎9階から、一人の女性が飛び降り自殺を図り、たまたま下を歩いていた20才の女子学生が巻き添えをくって重体になったという、あの悲惨な事件。

この飛び降り自殺を図った女性は、調布教会の信徒で、今春の復活祭に受洗したばかりの方でした。ここ最近、うつ病になやまされてきました。彼女がどういう理由で、またどのような経緯であるような痛ましく悲しい終わりを迎えたのか、第三者が詮索したり、判断できるものではありませんし、善悪を断定できるはずはありません。私たちの身近で起った出来事を通して、いのちや永遠のいのちについて考えてみたいのです。

ひとつのいのちの終わりは、それで終わりではなく、新しい現実のはじまりとなりました。あの痛ましい事件の翌朝、亡くなった方のご主人とお会いして、じっくり話をうかがうことができました。その時、痛ましい事件が終わっただけでなく、新たに痛ましい事件が始まったことを痛感しました。ご高齢で、病いをかかえた唯一の家族であるご主人が、たったひとり残されたしまった。その方の嘆き悲しみがどれほどのものか、はたの者には推し測ることはできません。その方の今と、これからの人生は？ さらに、あとひとつの大きな事実があります。巻き添えをくった女子学生の今と、これからの長い長い人生は？ ひとつのいのちの死がもたらした新たな十字架、かかえきれないほどの十字架、他の人がかわってになうことのできない十字架の道行きが始まったのです。それぞれの家族や身内の方々、友人知人たちにとっても、思いがけなくふってわいたかのような十字架の道行。いろんな方々がさまざまな思いをもって、重くて辛い十字架をになって生きていかなければならないのです。私も、受洗の準備をしたコンプリ神父も、共に学んだ仲間たちも、どうして自分たちが何とか力になれなかったのかと自責の念に襲われています。

いのちの誕生と、いのちの終わりがもたらす様々なドラマと喜怒哀楽。待ち望まれ、歓迎され、多くの人たちに喜びと幸せをもたらすいのちがある。この世に光を見ることもなく、いのちから生み出される凡ゆる可能性が絶たれる、そんな小さいいのちがある。生きてくて、生きてくてたまらない幼い、若いいのちが、ある日突然、絶ち切られてしまう。そんないのちもある。重荷を負い、労苦する人々に希望となり、励まし支えとなる輝いたいのちがある。見るにしのびないいのちを、ただ引きのばされて、何年も何年も病床に釘づけになっているいのちもある。たつぷりと人生を生き抜いて使命も果たし、早く神様のもとにゆきたいと願って祈るが、仲々きき入れてもらえないでいるいのちもある。天寿を完うし、誰からも祝福されて天の故郷に戻ってゆくいのちもある。

私たちが生涯において一番、必死になれるのは何か。お金でもなければ仕事でもない。人間関係のことでもない。それはいのちの問題ではないか。いのちというのは、それほど誰にとっても最大の関心事ではないかと思う。いのちは自分のものであって、自分のものではない。いのちはその家族のものであって、その家族のものだけではない。いのちのふしぎさ！いのちのもつ深遠さをわたしたちは、わかっていないのではないか。

わたし個人で、いのちを操作できるものではないし、してはいけないと思わせる神聖さが、いのちにはあります。わたしたち人間の手で、いのちを操作できるものではないし、してはいけないと思わせる神聖さとふしぎさがいのちにはあります。自分で自分のいのちを手にかける。また他の人のいのちを手にかける。わたしたち人間に、そんな権利や資格があるでしょうか。そんなことが到底できないくらい、いのちには神聖さと尊さと、ふしぎさ、神秘があると思うのです。もし、わたしたち人間が、そんないのちに手をかけ、いじるとするならば、予期せぬ形で、いのちそのものから仕返しがくるのではないか。考えられないくらいの恐ろしい悲惨さ、痛ましさ、試練が生じてくる。今回のできごとを通してわたしは、そのことをあらためて痛感しました。

永遠のいのちとは何か。よくわかりません。死後にあると教えられている永遠のいのちというのは、今あるいのちの連続ではないか。今あるいのちの延長線上にあるのではないか。今あるいのちと、どう向き合うか、それが永遠のいのちをどう手にするかとつながっているように思えるのです。「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」(マルコ10/17)

生きていることはすばらしい。いのちはすばらしい。だからいのちを大切にしようとは、必ずしも、誰に向かっても簡単に言えません。生きていることが大変な試練であり、苦しみ以外の何ものでもないという人も少なくないからです。けれども、生きていることはふしぎだ。いのちというのは神秘だ。だから、ふしぎで神秘的ないのちを折角だから生きてみたらどうか、もう少し体験してみたらどうかなら、言えるかも知れません。

「主よ、永遠の命を手にするにはどうしたらいいのですか？」この問いかけを折ある毎に発してみたい。神様の前で、なりふりかまわず、建前ではなく本音で、自分の弱さ、醜さを恐れずにぶつけていく勇気をもちたい。神様なら何とかしてくれるという信頼をもって。そうすることによって救いを手にした例が福音書の中にいくつもあります。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。神は、あらゆる苦難に際して、わたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」(IIコリント1/3~4)



さようなら、チマッティホール

GOOD-BYE



47年間への祈りと感謝を込めて



いよいよ来春より新聖堂の建設が始まります。

1959年12月20日、調布教会の初代聖堂として誕生したチマッティホール。以来祈りの場として、そして信徒ホールとして私たちと歩んできた半世紀にわたる歴史の幕を閉じようとしています。

今号のシャロームでは、様々な思いの詰まったチマッティホール、その思いを綴っていただきました。調布教会で最初から敷地内にあった最後の建物、47年間にわたる私たちの祈りの染み込んだ建物が消えてゆきます。しかし、ここから新しい調布教会が始まります。新聖堂建設が無事に滞りなく進むようにお祈りいたしましょう。

1960年（昭和35年）頃のチマッティホール（旧聖堂）

● チマッティホールのあゆみ

- 1950年（昭和25年） サレジオ神学院、調布に移転。
喜多見教会・吉祥寺教会に属していた十数名の信徒が、ミサのためにサレジオ神学院のチャペルに通うようになる。
- 1951年（昭和26年） ユース・センターが始まる。
- 1952年（昭和27年） チマッティ神父様、神学院の院長となる。
次第に信徒が増え、ユース・センターも盛んになる。
信徒専用の聖堂の必要が出てくる。
- 1955年（昭和30年） チマッティ神父様、叙階50周年を迎える。
- 1959年（昭和34年） チマッティ神父様、80歳を迎える。
信徒やユース・センターの子供たちの数もさらに増え、当時敷地内にあったヤマハ楽器の倉庫を聖堂に改装することを計画。
- 1959年（昭和34年）12月 グルクマン管区長の祝福により聖堂落成式が行われる。（20日）
- 1965年（昭和40年）10月 チマッティ神父様、帰天。（6日）
- 1967年（昭和42年）10月 調布教会が正式に小教区として認められる。主任司祭池田貞夫神父様（6日）
- 1967年（昭和42年）10月 神学院にチマッティ記念聖堂が建てられ、調布教会もこの聖堂を使い始める。
旧聖堂は「チマッティホール」となる。
- 1986年（昭和61年）1月 臨時信徒総会で現聖堂・信徒会館の建設計画が承認される。
- 1991年（平成3年）3月 現聖堂・信徒会館落成式（復活の祝日）
- 2004年（平成16年）5月 信徒総会で新聖堂の建設計画が承認される。
- 2007年（平成19年）2月 チマッティホール解体（予定）
- 2007年（平成19年）10月 新聖堂竣工（予定）
- 2008年（平成20年）1月 新聖堂献堂式（予定）

● 「カトリック調布教会25周年記念誌」、シャローム134号コンプリ神父様「チマッティ神父と調布教会」より抜粋

チマッティ神父様とヘンドリックス神父様の作品



● ヨゼフ S. I.

THANKS & GOOD-BYE, CIMATTI HALL.

新しいお聖堂の基本設計も固まりいよいよ実施設計に入りました。

着工となると長年慣れ親しんだチマッティホールも取り壊すことになります。

誠にやむを得ないことですが、懐かしさもからんで寂しい気もいたします。

チマッティ神父様の愛弟子でもあり、その伝記も書かれたクレバコーレ神父様が生前、申されていた言葉の中に「調布教会の旧聖堂（現チマッティホール）はチマッティ神父様が建てられた最後の記念すべき建物で、神父様が列聖された暁には大変貴重なものになるでしょう」と言うことがありました。

昭和30年代に修道院の御ミサにあずかる何人かの信徒がおりましたが、チマッティ神父様はその方達のための聖堂がないのは可哀想と考えられて、元倉庫であった建物を改造されて信徒のための聖堂となされました。

乏しい資金をやり繰りされてのお仕事で、神父様のお骨折りと信徒に対するお心が染み込んだ建物です。

私共が調布教会に参りました時には、既に神父様は天国に召された後でしたので、直接お目にかかれることはなかったのですが、その御遺徳には接する機会が多かった訳です。

旧聖堂の正面の壁には、大きな最後の晩餐の壁画がありました。伺いますと前の育英工業専門学校のヘンドリックス神父様が若い頃に描かれたもので、ソフトな親しみ易い絵です。信徒は毎週の日曜日にこの絵を見ながら御ミサにあずかったものです。当時の信徒にとっては深く印象に残る絵画です。



この絵は今でもチマッティホールの南側の壁に残されておりますが、塗り壁の上にじかに書かれておりますので、建物の取り壊しとともに消滅してしまう運命にあります。

これに対して何とかこの絵を残して欲しいという強い希望も出ております。ただフレスコ画であるため、絵を壊さずにどのようにして壁から外すか、色々と技術的に難しい問題があると思います。

この絵に関してもう一つ思い出すのは、昭和40年代の寒い朝でしたが、日曜日のミサに集まる信徒の為に池田神父様が早朝からストーブを焚いてお聖堂を暖めていて下さったのですが、その日に限って、ストーブのごきげんが悪く、不完全燃焼を起こしてしまいました。

最初に来られた方の話では、部屋中はもうもうたる煙と煤で大変だったそうです。何人かの協力のお陰で一応の掃除を済ませ日曜のミサは無事に終えることができました。

しかし最後の晩餐の壁画だけは塗り直す訳にもいかずにそのままになっており、全体としてグレー調の壁画になってしまいました。

したがって壁画を残すには、画面全体を薬品処理でもして修復する必要があると思います。

いよいよチマッティホールの取り壊しも迫って参りますが、チマッティ神父様の精神は新しい聖堂の中にも生かして行きたいと思う次第です。

サレジオ高専の前身、育英高専時代を支えられた元校長 フランス・ヘンドリックス神父様が平成18年11月8日、「瑞室中綬章」を受賞されました。これはヘンドリックス神父様が、長年にわたり青少年の教育に尽力したことに対して授けられる名誉あるものです。今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

チマッティホールは昔、御聖堂でした



● Y. U.

THANKS & GOOD-BYE, CIMATTI HALL.

重たい木の扉を開けると、私の目にとびこんできたのは「黒っぼい」景色でした。1972年(昭和47年)春、まだ肌寒い頃、御聖堂のイスに座っている方々の後ろ姿は、皆黒く、黒や紺色のスーツ姿が多かったせいでしょうか。隙間風と歩けば軋む木の床。祭壇後方に描かれた最後の晩餐の素朴な壁画が更に静けさと清貧をもたらししているようでした。

その一か月前に調布富士見町2丁目に転居してきたものの、教会がどこにあるかも調べずに、私たち夫婦は毎日曜日、1時間以上かけて板橋教会まで通っていたものでした。

ある方から「近くにサレジオ会の修道院がある」と聞き、それでは…と恐る恐る訪ねた時の印象です。

その小さな聖堂の由来は1950年(昭和25年)にサレジオ修道院が調布の地に移転してから数年、ミサに来る近隣の信者が激増したため、当時、神学院の敷地内に点在していた木造工場★のひとつを、チマッティ神父様の御尽力で信者用聖堂として改造して頂いたもの、とお聞かしています。

第一子の出産を終え、しばらく振りで教会を訪れた時はサレジオ神学院の聖堂をお借りしてのミサとなっており、あの小さく質素な建物は旧聖堂と呼ばれ、子ども会の子達のために使用されるようになっていました。

チマッティ神父様の牧者としての愛を頂いてできた旧聖堂(チマッティホール)が、今、また新たな聖堂として生まれ変わろうとしています。感慨深いことです。

★ヤマハ楽器の工場跡、戦時中は飛行機のプロペラを作る軍需工場に使われていた。

祈りの働き ● S. T.

THANKS & GOOD-BYE,
CIMATTI HALL.



39年前に調布へ越してきました。長男3才、長女、次男生後2ヶ月の三人をかかえ、家から15分歩いて、聖堂にたどりつく。初めて訪ねた教会で暖かく迎えていただき感動したことを覚えます。

調布教会はちょうど小教区になったばかりで主任神父は池田神父様でした。信者の人数は覚えていませんが、ごミサ時には多くの方が集まってきていました。聖堂に入ると大きな手書きの絵、最後の晩餐の絵が壁にありました。描き方が、わかりやすく親しみのある絵でした。今は物入れの部屋と図書室にまたがった部屋に静かにねむっています。時折のぞいては昔を思い出しています。

現在は、チマッティホール、昔は聖堂。数えきれない祝福をいただき、多くの方の祈りがここには、生きています。また、その祈りは無駄にはならず新しい教会を誕生させる原動力になっていると思います。祈りの働きを信じます。

旧教会聖堂の思いで

THANKS & GOOD-BYE,
CIMATTI HALL.



- 1 こわされてなくなる。本当に寂しいことである。私(家族を含む)の信仰生活の原点は、旧聖堂から始まったといっても過言ではない。私の洗礼時の池田神父(実直な神父で大分前に天国に旅立ちされた)。その日時は、サレジオ会の納骨堂にいかないと正確な天国への招待日は不明のようである(納骨堂に記録されているか?)。
- 2 平成16年4月27日天国へ突然旅立ちをした私の妻は、子供2人を抱えた貧乏暮らしの中で種々活動をした一人であるが、今は亡くその中身について聞きようがない。残念なことではあるが。
- 3 家族四人(長男・次男)の貧乏暮らし中で教会活動を応援したことは夢のようである。とにかく貧乏であったことは厳粛な事実であり旧教会聖堂と併せてその事が色々と思いだされる。
- 4 子供二人(長男・次男)身体を張って働くことができる年齢であるのに、さっぱり教会によりつかないままの状況の中で旧教会聖堂が姿を消す。二人はどのように思うか聞いてみたいところである。

- 5 歴史の流れとはいえ建物とともに働き利用してきた一信徒として、旧教会聖堂に対し本当にご苦労さまと申しあげたいところである。
- 6 最後に旧教会聖堂と関わりあった聖職者の方々を私なりに書くことにいたします。

職 種	氏 名	靈 名	年 齢	帰 天
司 祭	石元 博	フランシスコ	66歳	1991年 1月22日
//	松尾 栄一郎	ヨゼフ	72歳	1995年 1月20日
//	クレバコーレ・アルフォンソ		79歳	1995年11月28日
//	マンテガッツ	ヨハネ	83歳	1997年 1月23日
//	中垣フランク純	ヨハネ・ボスコ	69歳	1999年 1月 2日
//	フォルツナダニロ		77歳	2003年11月27日
修道士	マエストロジュリオ		81歳	2003年11月27日
司 祭	石川 康輔	ヨゼフ	65歳	2004年 1月14日
司 祭	ダルクマン・ヨハン		93歳	2005年 5月10日
修道士	田中 純	フランシスコ・アシジ	79歳	2005年 9月16日

★筆者ご本人の希望により匿名で掲載しました。

危険なクリスマス ● 金子神父

THANKS & GOOD-BYE,
CIMATTI HALL.



編集部から、チマッティ・ホール、かつての聖堂にまつわる思い出を綴ってほしい、との申し出がありました。

はて、考えているうちに、記憶の糸がほつれにほつれて、結局思い出すことが皆無に近いことを知って、愕然としたのです。チマッティ・ホール、聖堂に結びつくものがこんなに貧弱だとすると、いったい私は何をしていたんだろうかという問題にぶつかるわけです。

そこで、頭をしぼりにしぼって、ふと浮かんできたのは、一度あの聖堂で、登山家だという方の結婚式があり、そのあと、パーティをそこでしたことだけでした。

情けないことです。考えてみると、これはふしぎですね。

主任神父在職はほんの2年間そこではなかったでしょうか。あとは助任を2回したことを覚えています。

聖堂のことより、古い昔の司祭館、青年、壮年、婦人方の会のこと、その人たちの交流、活動は、とくに私は青年会を担当したことをよく覚えています。

美ヶ原、甲府の老人ホーム、松本、上高地など盛んに遠征したり、ホットラインという青年会誌(今もあるでしょうか)を発行したり、ずい分、活動?または徘徊していましたね。

ひとつクリスマスの馬小屋作りで特別な印象深いことがありました。

藤川神父さんはいつも着想バツグンでハッとするような馬小屋をつくりますが、私ときたら単純、しかも一度だけ危険極まりない(今考えると)馬小屋を司祭館内につくったことがありました。大きな壇(昔、教会の黒板前にありましたね)大小二つを重ね、その上に円筒形の大小のローソ

ク如きものを紙でつくり豆電球を入れました。円筒形のローソクの数カ所に、丸や四角を切り抜いて、赤青などのセロファンをはりつけました。

そのローソクの間には馬、牛、牧人たちを配し、真ん中の広い空間に幼児イエスと聖母とヨゼフの像を置きました。

問題はその後でした。これだけでは淋しいので、樹で森をつくろうと思いました。しかし労力が大変です。ふと思いついたのが、多摩川べりにたくさん生えていた枯れすすきの森です。

毎日青年とすすきがりに出かけ、穂が散らないように司祭室の奥に一本一本静かに集め、24日夕刻から馬小屋のまわりに数本、10本ずつゆっくりゆっくり置いたり、結びつけたり植木鉢にさしこんだりしました。

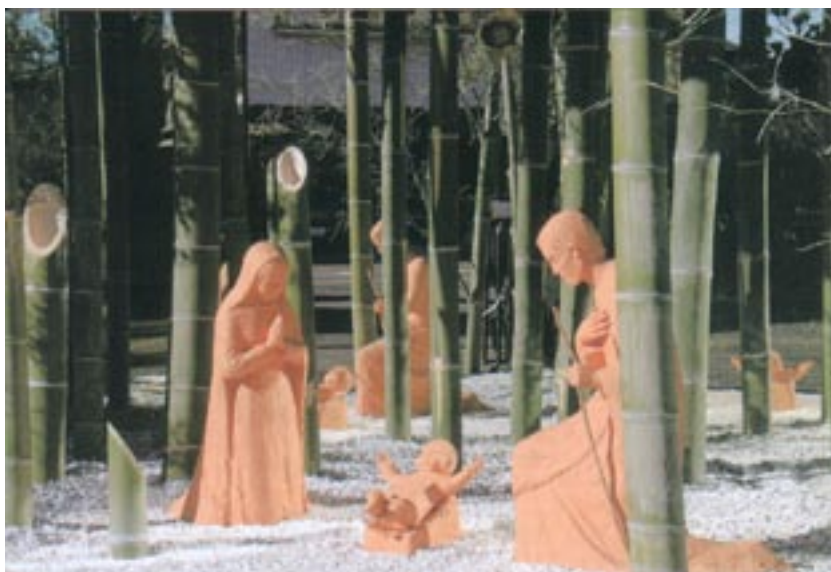
深夜ミサの前に、電球をつけますと枯れすすきの森が豆電球のローソクのかすかな光に揺れて幻想的でした。

私は喜んだのもほんの一瞬、これは大変だ。キケンだと背すじがこおりつきました。

もし誰かくわえたばこだったり、ライターをつけたら、あの枯れすすきはたちまちろうげんの火のように燃えあがり、たちまち教会は炎の海になる。

さっそくおふれを発令して火の気いっさい「ごはっと」、何度も何度もマッチ、タバコ、火は使用すべからずと相成ったわけですが、何しろクリスマスですから炊事場で火を使わぬわけにはいきません。とうとう枯れすすき馬小屋の一件はあえなく終わった、という前代未聞のおそまつな決着でした。

ただし、「思い出」としてはこれは天下一品でした。



この馬小屋は2005年（平成17年）のクリスマスのもので、

鏡を背景に竹林の幼子イエスを表現したプレゼピオ（馬小屋）です。

現在クリスマスカードとして販売しております。教会事務室でお求めください。

■ 降誕祭によせて

クリスマス アジア

今年も降誕祭の季節となりました。今号のシャロームは、ちょっと趣向を変えて海外のクリスマスの様子をお伝えします。調布教会にも海外から来られた方が数多くいらっしゃいます。そこで今回はアジアからいらした方々にクリスマスの様子を綴っていただきました。

フィリピンのクリスマス

● L. M. S.

私はフィリピンのバタンガス出身で、日本人との結婚を機会に1995年8月に日本に來日して11年になりました。昨年一人息子が生まれ、今はとても幸せに暮らしています。息子の名前は亙です。

またクリスマスがめぐってきました。フィリピンと言えば世界一長いクリスマスです。友達から親戚、そして近所の人達まで招いてもてなすホスピタリティー豊かな国です。クリスマスやお正月には当然のように家族が集まる大切な日です。とにかく人が集まるのが大好きです。

12月に入るやいなや、フィリピンは一年中で一番賑やかな時を迎えます。クリスマス商戦がはじまり、至る所でクリスマスデコレーションが施されます。これまた一般家庭も同じで、クリスマスツリーが飾られ、壁には Merry Christmas And Happy New Year! の文字が張られます。

フィリピンでは、クリスマスカードはクリスマスの前に届くようにしなければなりません。早く届いたカードは、それだけ長い間部屋の中に飾られて人のところを和ませてくれるわけです。

クリスマスイブまで2～3週間もあるというのに、挨拶はメリークリスマスになります。フィリピンのクリスマスタイムは12月1日から年が明けた1月6日までです。ク



フィリピン共和国
Republic of the Philippines

- ・面積 299,404km²(日本の8割の広さ)。7,109の島がある。
- ・人口 8,300万人(2004年世界銀行データ)
- ・首都 メトロ・マニラ(人口993万人)
- ・人種 マレー系が主体。他に中国系、スペイン系、及びこれらとの混血、少数民族等がいる。
- ・言語 国語はフィリピン語、公用語はフィリピン語と英語。80前後の言語がある。
- ・宗教 国民の83%がカトリック、その他のキリスト教が10%、イスラム教は5%。
- ・通貨 フィリピン・ペソ (PHP)
- ・略史
- 1521年 マジェランのフィリピン到着
- 1571年 スペインの統治開始
- 1898年 米西戦争中の6月12日、アギナルド将軍が独立を宣言。米西パリ講話条約調印により、米の統治開始
- 1935年 独立準備政府(コモンウェルス)発足
- 1942年 日本軍政開始
- 1946年 7月4日、フィリピン共和国独立
- 1965年 マルコス大統領就任
- 1986年 2月革命によりアキノ大統領就任、マルコス大統領亡命
- 1992年 ラモス大統領就任
- 1998年 エストラダ大統領就任
- 2001年 アロヨ大統領就任
- 2004年 アロヨ大統領当選

外務省「各国情勢」より2006年11月現在

クリスマス時期になると、とにかく使い果さんとばかりにパーティーや年越しの食料品や家のクリスマスデコレーションなどにお金を使います。普段我慢している高い買い物も、クリスマスだから買っちゃえとばかりに買う人も多いです。

フィリピン人は一年貯めたお金を、クリスマスで全て使い果たします。これも普段豊かな暮らしをしているわけではないのだから、楽しめる時はおもいっきり楽しもうというフィリピンの国民性なのです。

クリスマスソングは一日中かけっぱなしです。

12月16日からクリスマスまで毎日早朝の3時に教会に行きます。老若男女みんなでワクワクしながら行きます。教会の周りにはライスケーキ、蒸しパンなどフィリピンの伝統的な食べ物や飲み物などの屋台が出ていて、朝ごはんをそこで食べるのも楽しみの一つです。また子供たちは2~3人でグループになってクリスマスキャロルを歌い、キャンディやお菓子をもらいます。クリスマスのクライマックスはクリスマスイブです。その日は家族そろって教会に行きます。クリスマスの日に子供たちは一番おしゃれな洋服を着て、名付け親や親戚や友達の所に挨拶に行き、年配の方の手にキスをして尊敬の意を表わします。その代わりにプレゼントをもらいます。

フィリピンのクリスマスパーティーの特徴は、家族がいつもみんな一緒ということでしょう。

クリスマスするときだけ、みんな道徳を守り神聖な気持ちになって、できるだけ悪いことをしないように心がけます。どこの家でも鍵をかけなくても安心です。なぜならば空き巣も泥棒も入らないからです。

イエス・キリストの誕生を祝って、その日は純粋な気持ちで過ごします。

ここからクリスマスを祝い、新しい年には一年中あなた方がクリスマスの恵みを受けられますように。

Maligayang Pasko At Manigong Bagong Taon!



インドネシアのクリスマス

● M. M.

まず、インドネシアのクリスチアンの歴史についてお話しします。

1595年頃、オランダの植民地の時代にキリスト教が伝わってきました。(インドネシアは、350年間オランダの植民地でした。)

インドネシアでは、他の宗教は、仏教、ヒンズー教そしてイスラム教が伝わってきました。インドネシアは、ほとんどイスラム教と思われていますが、実際はそうではありません。

およそ25%はキリスト教徒です。オランダの植民地時代に建設された教会(カテドラル)がどこの地域でも残っています。

私の子供の頃、異なった宗教でも仲良く暮らしていました。例えば、クリスマスの日に他の宗教の人に、食べ物をお分けしたりしてお祝いしていました。逆に、他の宗教の人と同じようにしてお祝いしていました。

今では、クリスマスは、世界中どこでも同じです。

人々は買い物をしたり、新しい服を買ったり、家の中を飾りつけたりして、楽しくお祝いをします。

インドネシアでは、七面鳥の中にご飯をつめてオーブンの中で焼いた料理やケーキなどを作ってみんなで食べます。

クリスマスイブにキリスト教徒の人々は深夜に教会に行き、お祈りします。この時期は他の時に比べて、たくさんの信者が教会に集まってお祈りします。ミサが終わった後、パーティーがあり、みんな心が豊かになり、クリスマスが終わった後もこの気持ちを持ち続けています。

インドネシア共和国

Republic of Indonesia

- ・面積 約189万平方キロ(日本の約5倍)
- ・人口 約2.17億人(2004年政府推計)
- ・首都 ジャカルタ(人口864万人:2003年推計)
- ・人種 大半がマレー系(ジャワ、スンダ等27種族)
- ・言語 インドネシア語
- ・宗教 イスラム教87%、キリスト教10%、ヒンズー教2%
- ・通貨 ルピア (IDR)
- ・略史
- 7世紀 スマトラを中心に仏教王国スリウィジャヤ王国が成立。以後ジャワを中心に仏教、ヒンズー王国が興る。
- 13世紀 イスラム教の伝来(アチェ地方)
- 1512年 ポルトガル、モルッカ諸島のアンボン占領
- 1602年 オランダ、ジャワに東インド会社を設立。植民地経営に乗り出す。
- 1945年 インドネシア独立宣言
- 1967年 スカルノ大統領の権限をスハルトに移譲
- 1968年 スハルト、第2代大統領に就任
- 1998年 ハビビ大統領就任
- 1999年 ワヒッド大統領就任
- 2001年 メガワティ大統領就任
- 2004年 ユドヨノ大統領就任(第6代大統領)

外務省「各国情勢」より2006年11月現在

「あなたの心の中に イエス様がお生まれになりました」

シスター 坂井 佐奈栄 FMA

私がまだ調布教会の中学生会に通っていた頃、毎年クリスマス前にはシスター手作りの徳の花を行っていました。クリスマスを迎えるまでの9日間、1日ずつ書かれた徳の花★を実行し、クリスマスにイエス様をお迎えするためのよい準備としていました。教会大好き、中学生会大好きだった私にとって、教会へ行かない平日でも教会気分を味わえるこの徳の花は、毎年楽しみの1つでした。いよいよクリスマスを明日に控えたある年の夜、いつものように次の日の徳の花をゆっくり開いていきました。その瞬間、私の心の中に今でも忘れられない一言が書いてありました。「あなたの心の中に イエス様がお生まれになりました」この言葉が最後の徳の花。私の心の中にイエス様がお生まれになる。今では毎年当然のようにそれを感じ、自分の心の中にお生まれになるイエス様を迎える準備をするのですが、中学生だった私にとって、その言葉は衝撃的でした。そうか。イエス様はベツレヘムの馬小屋で、マリアさまの腕の中にお生まれになるのではなく、私の心の中にお生まれになる!そのために私の心を温かく、明るく準備してきたんだ。私の心にお生まれになるイエス様のことをあれこれ想像しているうちに、何とも言えない特別なクリスマスになったことを、今でも鮮明に覚えています。

また中高生時代、私たちの心にお生まれになるイエスさまへのプレゼントの一つはクリスマスミサ中のハンドベル演奏でした。たしか、最初にクリスマスミサでハンドベルを演奏してほしいと頼まれた私たちの目の前にあらわれたのは、ミュージックベル(音によって赤や青やオレンジや黄色の色のついたベル)でした。それでも嬉しくて、楽譜をコピーしてはベルと同じ色で印をつけ、何度も何度も練習していた私たち。そんな姿を見たからでしょうか、次の年には鈴木正夫神父様のご協力もあって、重々しい鍵付きの黒いケースに入った、銀一色のハンドベルを買っていただきました。指紋をつけたら音が変わってしまう。白い手袋をはめての取り扱い、そしてその音色の美しさに、私たちの練習にもますます熱が入り、調布教会のクリスマスミサでの演奏は毎年恒例となりました。

私にとって教会は第2の家庭でもあり、日曜日が待ちきれず、平日にも学校帰りに友だちと寄っては話し込み、特にクリスマス前には自分たちだけで泊まり込んでクリスマスカードを作ったりもしていました。ひそかに「このまま4人でシスターになっちゃおうか!」なんて話をしたこともありました。今では懐かしい心温まる思いでの数々。そんな私が8月に終生誓願を宣立するにあたり調布教会の皆様からいただいたお祈りが、私の修道生活の支えとなっていることを心から感謝致します。今年のクリスマス。イエスさまがベツレヘムで2000回お生まれになったとしても、私の心にお生まれにならないければ意味がありませんよね。調布教会の皆様は、そして中高生会の皆様はどんなクリスマスをお迎えになるのでしょうか。心からお祈りいたします。

★徳の花(とくのはな)とは、良いことやお祈りなどを良い行いをたくさんして祝日を準備することで、心に花束をつくることをいいます。ヨーロッパの古来からの習慣「ノヴェナ(9日間の祈り)」を起源としています。

多摩東宣教協力体の最近の動き ● T. T.

多摩、府中、調布の三教会が多摩東宣教協力体を構成してから約3年が過ぎました。

調布教会での交流ミサを皮切りに、各種の活動が為されて来ましたが、以下に、この半年間ほどの協力体の動きをご紹介します。

1. 多摩教会での交流ミサ

4月29日に、多摩教会で三教会合同の交流ミサが挙げられました。多摩の加藤神父様、府中教会のアルベルト神父様、そして藤川神父様の共同司式の下、聖堂が一杯になるほどの信徒がミサに与かりました。

アットホームな感じのミサ、美しい聖歌の独唱、ミサ後の大人と子ども達の穏やかで親密な会話など、普段の多摩教会の雰囲気に触れることの出来た一日でした。

藤川神父様のお説教は他教会の人たちに好評だったようで、私達も加藤神父様、アルベルト神父様のお説教を頂く機会がもっとあれば、お祈りの深さと幅が増えるかも知れません。

因みに、来年は調布教会に交流ミサ運営の順番が廻ってきます。未だ詳細は決定していませんが、4月30日(月曜日で休日)に行いたいと心積もりをしています。神学院聖堂でのミサ、地下聖堂訪問、チマッティ資料館見学、コンプリ神父様の聖骸布の講義等を考えています。

2. 中高生の夏季合同合宿

8月22日～25日の日程で、野尻湖で行われました。参加者は15人(多摩3人、府中3人、調布9人)で、引率は加藤神父様、スタッフはサレジオ神学生のOさん他5人でした。

スタッフが少人数のため、大変ご苦労されたそうですが、実りの多いイベントでした。事前の相互親密化のための映画鑑賞会とその分かち合い、合宿中の分かち合い、後日のカレーパーティー等を通して、若者達は大きく成長したようです。

3. 三教会共通意向の共同祈願文の冊子化

宣教協力体が発足して以来、共通意向の共同祈願を三教会で行ってきました。祈願文の数が大分蓄積されましたので、これらを整理し、小冊子を作成して、各主日にはこの中からその主日に適切な祈願文を選び、祈願することにします。

整理に当たっては、類似のテーマのものは纏め、数の少ないテーマのものは新しく祈願文を作成するなどの作業を、Kさん(多摩)、Oさん(府中)、Uさん(調布)の三人の方が当たられています。

小冊子の完成は来年の復活祭の予定です。

4. 東京大司教区主催死者追悼ミサお手伝い

毎年11月に、東京大司教区では、府中カトリック墓地の聖堂で、死者の追悼ミサを挙げています。従来は府中教会の方達が先唱、朗読、オルガン、駐車整理等のお手伝いをされていましたが、今年から多摩、調布教会もこのお手伝いに加わることになりました。調布教会の担当は受付と献金集めで、Y教会委員長他4人が参加し、とりあえず無事に役目を果たしました。

式は10月5日、晴天の下、午後2時から岡田大司教様の司式により行われ、聖堂に入り切れず、前の広場の半分を埋め尽くすほどの人が参加しました。式の後、岡田大司教様を囲んでお手伝いの人たちのサンドウィッチパーティがありました。

5. 高齢者対称の福祉活動

高齢の方への教会からのアプローチについては、現状では、三教会が個別、離散的に活動している段階で、協力体の定例協議会で話し合いが行われていますが、三教会を有機的に繋いでの組織活動の絵は未だ描けていません。模索段階です。

府中教会は、壁掛け型の大きな高齢者居住マップを作成し、活用しています。

6. 行政体との関係事項

日常の教会活動においては、防犯、防火、衛生、税務に関する法規遵守・行政体との交渉等が必要ですが、この問題は三教会が共同で対応するものではなく、個別に所属する行政体と交渉・処理するものです。ただ、入手した知識・知恵はお互いに共有し、それぞれの教会内で活用することが出来ます。先ず、これらの問題それぞれについて東京大司教区の指導を頂くことにしました。

7. 東京カテドラル修繕のための献金

東京カテドラルの屋根の雨漏りが経年劣化のために激しくなり、大規模修繕が必要になってきたそうです。後顧の憂いを無くすために、下地を建築時以上の仕様にして、根本的に修繕するために8億円強の資金が必要になるそうです。このうち3億円を信徒の献金に頼る計画が司教区において進められています。具体的な献金要請は未だ周知されていません。

以上、多摩東宣教協力体の最近の活動内容・共通話題をご紹介しましたが、この中でお気付きの点がありましたらお知らせください。他にも協力体の活動として、こういうこともしたい、してもらいたいというテーマがありましたら是非ご提案願います。

また、多摩・府中教会でも調布教会と同様にバザー、コンサート、講演会、映画上映等の催しが行われています。その都度お知らせいたしますので、興味をお持ちの催しに是非ご参加ください。多摩東宣教協力体の今後の発展のためにお祈り願います。

教会のあゆみ [2006年7月—11月]

この記事は、日曜学校サマーキャンプに参加した子供たちの感想文と写真を元に構成したものです。文中の発言と写真に写っている子供は必ずしも一致しません。





たのしかったことは
すいかわりです。
くるくるまわって
あるいて、
ふちふちしたけど
みんなが
いいよ！
いいよー！
うれしくれて
うれしかったです。



そばを切るのを
ほとんどやって
手がいたくなつた
けどおいしかったし、
楽しかったです。

一番楽しかったのは、
「スタンツ」です。
1点差で2位だった
けど、みんながんばった
ので1番楽しかったです。



みなさん、ありがとうございました。



最後に浦田神父様との一問一答。
Q: 「子供たちやリーダーたちの様子は普段とどう違っていましたか？」
A: 「子供たちは、いつもよりさらに生き生きしていました。
青年リーダーも子供たちと共にいる喜びを噛みしめているよう
でした。もちろん僕自身もです。」
Q: 「神父様にとって二年目のキャンプでしたが、何か感じたことは？」
A: 「すべてわかったつもりで臨んだのですが、実は何もわかって
いなかったということがわかりました。」

● 8月22日(火)～25日(金)

多摩東宣教協力体三教会合同中高生キャンプ(野尻湖)

8月22日(火)から25日(金)までの3泊4日間、野尻湖カトリック教会で、多摩東宣教協力体の三教会合同中高生キャンプが行われました。中高生は14名(多摩3名、府中3名、調布8名)、スタッフは、多摩教会からは主任司祭の加藤豊神父様はじめ3名、府中教会から1名、調布教会から4名の8名、総勢22名でした。

三教会が初めて合同で行ったこのキャンプがどんなものであったかは、下の高校生の感想文をお読みください。そこにある通り、ひとことと言って、参加者一人ひとりが、互いに「かけがえのないなかま」となることが出来たすばらしい4日間でした。このキャンプで生まれたお互いのきずながいっそう深まり、また、この「なかま」の輪がさらに広がっていくことを願っています。

このキャンプのために、皆様方から、たくさんのお祈りと、物心両面でのご支援とを頂きました。心より感謝します。引き続き、三教会の中高生の交流が深まり、キリストにおける「なかま」として互いに成長していくことができるよう、どうぞ支え、見守って下さい。

サレジオ神学院・D. O.



三教会合同キャンプに参加して

多摩教会 H. T.(高一)

「なかま」—「ともに仕事をする人。また、その集まり」と辞書に書いてある。私はこのキャンプで真の意味での「なかま」を得ることができた。ともに遊び、ともにミサにあずかり、ともに食事を作り、ともに学んだ。そんな素晴らしい、そしてかけがえのない「なかま」を私は得た。

初日に集合した時はまだ、私は不安でいっぱいであった。本当にこの「人」と4日間なかよく教会の壁を越えてつきあえるのだろうか?私は非常に心配だった。バスレクの時もテンションは低かったし、なんとも言えない空気が我々の間をおおっていた。

しかし、「人」→「友」となるイベントがあった。2日目のスポーツ大会である。私はスポーツの言葉や人種の違いを乗り越えていくだけの力を実感した。ましてや、私達は同じカトリック信者である。そんな壁を乗り越えるのはスポーツにはたやすい。私達の口数もどんどん増していった。私も積極的に発言できるようになり、みなで一つになることができ、非常に気持ちがよかった。

さらに「友」→「なかのいい友」となるイベントが3日目、スタンツ大会であった。スタンツとはあらかじめ分けられた班単位でお互いに出し物をし合い、自分を表現するものであるが、この企画の素晴らしいところは「テーマが自由」ということだ、と私は思う。今回は劇をしなければならない、とリーダーから指定があったが、それでも内容は自由そのものだった。コントのようなことをやった班もあったし、聖書の話を知りやすく解説した劇もあった。しかし、その中に共通してあるのは「自分達を何かしらの型で表現する」というものだ、と私は思った。テーマが自由だったから、みなとても生き活きとしていて、非常に楽しかった。そして、私も発表をした。劇の発表もしたが、ギターを弾いたりもした。発表をしている間、私は何かとてもいい気持ちになった。そして発表が終わって拍手—とてもうれしかった。極めつけにその後の光の集い（このキャンプでの感想を1人ずつ発表していくもの）でみんなが一つになったことを実感した。なんともいえない、この一体感に私は酔いしれた。これで、私達は「なかのいい友達」→「なかま」となった。

私はこれで終わりだと思っていた。「なかま」以上の発展は私達にはないであろう、と。しかし、それは愚かな考えであった。その事故は最終日のミサの中で起こった。

最終日のミサ（私は誠と一緒にギターで伴奏をしていた）の退堂の曲で「なかま」を弾いていると、最後の方でとなりから聞こえるギターの音が乱れている。私は「Mがこんな曲で間違えるはずないよなあ?」と思いつつなりを見た。すると・・・そこには涙を目にためたMの姿があった。私とMは古くからの友達、そして「なかま」だ。しかし、泣いているのを見たのははじめてであった。普段はあまり感情を表に出さない彼が泣いているのを見て、みんなが寄ってきた。この瞬間であろうか。私は感じた。みんなが「なかま」→「かけがえのないなかま」になったのを。そして、すばらしい一体感も感じた。私はいつまでも、この感情を、この瞬間を忘れないであろう。調布教会へ帰るバスの中でもその素晴らしい雰囲気は続いた。私は幸せであった。解散式にもう一回、みんなで「なかま」を歌ったときは、私もグッとくるものがあった。まだこの「なかま」と別れたくない。ずっと一緒にいたい。そんな気持ちであった。

最後に、この合宿を運営してくれたリーダーや神父様、山荘の管理人さんや、バスを運転して下さったY修道士さんにも、そして「かけがえのないなかま」となったキャンプの参加者全員に言いたい。「私となかまになってくれてありがとう。」

（『多摩カトリックニュース』2006年9月号より転載させていただきました。）

● 8月15日(火) 聖母被昇天

納涼会

聖母被昇天の祝日のミサ後、チマッティホールで納涼会が催されました。有志により手製の餃子600個が用意され、60名を超える参加者が焼きたての餃子に舌鼓を打ちました。また、余興として1さんのウクレレ弾き語りによるハワイアン演奏や、山野内神父様のギター弾き語り、ピアノを囲んでの合唱のほか、花火をして楽しい夏の宵を過ごしました。来年はみなさんも奮ってご参加下さい。

● 8月25日(金)～27日(日)

青年会サマーキャンプ

8月最後の週末、野尻湖において青年会のサマーキャンプが行われました。サレジオ神学院のS神学生、K神学生と共に9名が参加しました。都会の喧噪を離れ、野尻湖の大自然の中で、静かにゆったりとした気持ちで分かち合いができたようです。

● 9月17日(日)

敬老のお祝い

この日75歳以上の方を対象に敬老のお祝いが行われました。ミサの中では病者の塗油も行われ、教会の諸先輩方の健康をお祈りしました。その後チマッティホールでお祝いの会が催され、藤川神父様を囲んで会食の後、手品や劇などの余興を楽しみ歓談しました。

参加された方々に感想をうかがいました。

- ・手品が大成功でとても良かった。
- ・劇(葉っぱのフレディ)が面白かった。(多数)
- ・とても明るい楽しい会でした。
- ・周りの人たちとも色々お話をできて良かった。
- ・来年も皆誘って参加したい。

末永くお元気で居られるようお祈りいたします。



● 10月29日(日)

サレジオユースセンター・調布教会合同大バザー

今年も10月29日(日)に恒例の『調布教会合同大バザー』が開催されました。

前日の天気予報では「雨」とのことでしたが、皆様のお祈りにより晴天に恵まれた素晴らしいバザー日和となりました。

今年のバザーは「地域に開かれた教会建設を目指して—いよいよ来年着工!—」という目的で開催されましたが、それとは別に2つの大きな特長がありました。

ひとつは「霊的活動としてのバザー」ということです。

.....

バザー行事を通じて信仰の原点に立ち返り、また信徒の親睦を図ることこそ本質的な目的であると言っても過言ではありません。そこで参加される方が全員ミサに出席してからバザーに専念できるようにするため、第1部がミサ、第2部がバザー行事として開催されましたが、皆様方のご理解を得てバザー準備をはじめ、参加された皆様がミサに与ってからバザーに参加して頂き、大きな目的が達成できたと感じています。

次に「教会建設のための支援」ということです。

教会活動を行っている各活動グループが何らかの形で教会建設にかかわるという意味で、バザー当日には「新聖堂」の完成模型を展示したり、バザー抽選券の景品はすべて「教会建設ボランティア」のお楽しみ商品交換券として準備した結果、信徒の一人ひとりが教会活動を通じて教会建設にかかわる形を実現できたと感じています。

また、天候にも恵まれて当日のお客様は前年を上回る人数がご来場頂けたようですし、アトラクションの「子供達の新体操」もご来場の皆様方には、楽しい一時になったようです。地域の皆様方からも「毎年、調布教会のバザーを楽しみにしている」というようなご好評を賜り、出店して頂きました各活動グループの皆様方からも「教会建設に向けてすばらしいバザーが開催できた」とのご意見を頂戴いたしました。また、売上等は現在集計中ですが、昨年を上回る実績を上げられたのではないかと予想です。

これもひとえに、主任司祭の藤川神父様によるご指導と教会委員会を中心とした信徒の皆様方のご協力とご尽力の賜であると感じております。先の話になりますが、来年のバザーは「新聖堂」建設の最中に開催されますが、今年と同様に本来の意味で「教会建設」のためのバザーとなることを期待しております。最後になりましたが、信徒の皆様方をはじめ神学院やユースの皆様方のバザーへのご協力・ご支援に対して厚く御礼を申し上げます。

バザー委員長 T. K.



● 11月26日(日)

物故者追悼ミサ・墓参(カトリック府中墓地)

「死者の月」である11月最後の日曜日、カトリック府中墓地で物故者追悼ミサが執り行われました。ミサの後、墓地内の調布教会共同墓所へお参りし、亡くなられた方々にお祈りを捧げました。



調布教会共同墓所のご案内

緑豊かなカトリック府中墓地の一角に調布教会共同墓所があります。

毎年死者の月には、主任司祭や教会委員長をはじめ、大勢の信徒が墓前で祈りを捧げています。調布教会として確保してある納骨棚にまだ余裕があります。備えておきたいとお考えの方は、いつでも受け付けておりますので、直接教会窓口へお越しくださるか、電話でお問い合わせください。

一基10万円です。



お知らせ

これまでの主な行事 [2006年7月—12月]

2006年	祝祭日	教会行事
7月23日 (日)	年間第16主日	サレジオ六教会のつどい(三河島教会)
7月28日～ (金)		日曜学校サマーキャンプ(野尻湖)
7月31日 (月)		
8月 6日 (日)	主の変容	
8月15日 (火)	聖母被昇天	納涼大会
8月22日～ (火)		多摩東宣教協力体三教会
8月25日 (金)		中高生会合同キャンプ(野尻湖)
8月25日～ (金)		青年会サマーキャンプ(野尻湖)
8月27日 (土)		
9月14日 (木)	十字架称賛	
9月17日 (日)	年間第23主日	三島神父初ミサ
9月24日 (日)	年間第24主日	敬老のお祝い
10月29日 (日)	年間第29主日	サレジオユースセンター・調布教会合同大バザー
11月 1日 (水)	諸聖人の日	
11月 2日 (木)	死者の日	
11月 5日 (日)	年間第30主日	ユースフェスティバル
11月12日 (日)	年間第31主日	七五三のお祝い
11月26日 (日)	王であるキリスト	物故者追悼ミサ・墓参(カトリック府中墓地)
12月 3日 (日)	待降節第1主日	洗礼志願式
12月 8日 (金)	無原罪のマリア	
12月10日 (日)	待降節第2主日	多摩東宣教協力体評議会

Wishing you a Merry Christmas and a Happy New Year.

クリスマスは教会へ

降誕祭から年末年始にかけてのミサのご案内

12月24日 (日)	待降節第4主日	8:00	10:30	
	クリスマス・イブ	17:00	19:30 (洗礼式)	24:00
12月25日 (月)	主の降誕	8:00	10:30	
12月31日 (日)	聖家族	8:00	10:30	24:00
1月 1日 (月)	神の母・聖マリア	8:00	10:30	
1月 7日 (日)	主の公現	8:00	10:30	



これからの主な行事予定 [2006年12月—2007年4月]

2006年	祝祭日	教会行事
12月 17日 (日)	待降節第3主日	共同回心式・わいわいクリスマス
12月 24日 (日)	待降節第4主日	クリスマスイヴ
12月 25日 (月)	主の降誕	
12月 31日 (日)	聖家族	大晦日
2007年		
1月 1日 (月)	神の母聖マリア	
1月 7日 (日)	主の公現	
1月 8日 (月)	主の洗礼	
1月 14日 (月)	年間第2主日	チマッティホール謝恩とお別れ会・新年会・成人の日お祝い
1月 28日 (日)	年間第4主日	ドン・ボスコの祝賀(ミサ中)
1月 31日 (水)	聖ヨハネ・ボスコの祝日	
2月		チマッティホール解体工事開始
2月 2日 (金)	主の奉献	
2月 21日 (水)	灰の水曜日	
2月 25日 (日)	年間第8主日	臨時信徒総会
3月		新聖堂建設工事起工式
3月 11日 (日)	四旬節第1主日	洗礼志願式
3月 18日 (日)	四旬節第2主日	共同回心式
4月 1日 (日)	受難の主日(枝の主日)	
4月 5日 (木)	聖木曜日・主の晩餐	
4月 6日 (金)	聖金曜日・主の受難	十字架の道行き・受難の祭儀
4月 7日 (土)	聖土曜日	復活徹夜祭・洗礼式
4月 8日 (日)	復活の主日	

.....

2007年1月14日(日)

「チマッティホール謝恩とお別れ会・新年会・成人のお祝い」

10時00分のミサ後、聖堂前広場にて

解体工事着工を前に、チマッティホールへの感謝とお別れの会を行います。

あわせて、新年会と成人のお祝いを行います。

どうぞ皆さんご参加ください。

なお当日のミサは10時からの1回となりますのでご注意ください。

.....

2007年1月31日(水)

「ドン・ボスコの祝日」

1月31日は調布教会の守護聖人ドン・ボスコの祝日です。例年は新年会を兼ねてお祝いをしてきましたが、来年はチマッティホール解体工事との兼ね合いから、1月28日(日)のミサの中でお祝いをいたします

.....